

君彼岸にあっても葦編三絶なりや

塚 原 博

福田君と親しく接する機会を得たのは、昭和58年度に長崎県文化課（当時）が実施した、小値賀空港建設に伴う殿崎遺跡の緊急発掘調査であった。当時の彼は25歳前後で、まだ学生のような雰囲気漂浮させていたことを、今でも思い出す。

この調査は、昭和57年度の副島和明・高野晋司両氏による範囲確認調査を経て実施されたもので、昭和58年度の本調査は福田君と高野晋司・草野誠司両氏との調査員3名体制で行われた。おおよそ1ヶ月を要した調査期間中、彼らはかつて武家屋敷だった旧家を丸ごと一軒貸切りで宿舎としていたが、近辺の人家からもやや離れて広い敷地に建つこの屋敷は、しばしば夜更けまで続くミーティング会場と化した。このミーティングに、小生も時折り参入したのは勿論の事である。

小値賀島の中心街は笛吹というが、この屋敷は笛吹の町からは結構離れていて、日が落ちると周囲は暗闇に包まれ、たまに通行する車両の音が聞こえる程度の清閑な、いや、寂しい場所でもあった。このような環境から若者たちが時に脱出を試みたことは、誰しも容易に推測されよう。ネオン目指して行く道は、心浮き浮きはずむ道。えっ、小値賀のタクシー営業時間は23時までだって。帰路は千鳥足の40分、夜更けの島の道には便乗できそうな車も通らず、文字通り「帰り道は遠かった〜」であったとかなかったとか。まだ独身時代の彼と、佐賀県に居るどなたかの闇夜のエピソードである。

因みに、小値賀町管内での大規模な発掘調査は、この殿崎遺跡が初めての経験であった。その調査成果は福田君の編著によって、昭和60年度に長崎県文化財調査報告書第83集として刊行されたが、180ページに及ぶこの報告書は、小値賀諸島における縄文時代の様相の一端を明らかにした、初めての学術書でもあった。

福田君と小生とは別府大学の同窓でもあり、彼の出身地である中通島（旧新魚目町）と小生が住む小値賀島は隣接する位置関係であることもあって、何かと親しくして頂いた。出張などで長崎を訪問した際などには酒を酌み交わす機会も度々であったが、よく気を使っていた。それにしても、彼はよく勉強していたと思う。題とした葦編三絶とは史記に出てくる言葉で、学問に熱心なこと、あるいは努力を繰り返してその道に熟達することのたとえ、とされる。小生は居を構えていることもあって五島列島の歴史に深い関心を寄せているが、14世紀代以前の古代・中世期における下五島地域（現五島市管内）の歴史的空白期間には、特に興味をそそられている。彼が調査に関わり、執筆・編集して平成10年に刊行された長崎県文化財調査報告書第141集「大浜遺跡」は、その意味でも極めて重要な報告書だが、出土遺物も所属年代を含めて多岐に渡っていて、その報告内容は彼の勉学の広さと深さを示している。彼岸にあっても勉学に勤しんでいる、そんな彼の姿が目には浮かぶようである。

旧新魚目町長を勤められた亡きお父上とも幾度かお会いする機会があったが、わが子を語る少ない言葉の端々に息子への誇りを感じたことも、今思い出している。また、奈留島に居られる姉上ご夫妻にも大変なお世話を頂いたことがあったが、同地訪問の目的であった城岳城址も彼が発掘調査した遺跡である。残念ながら、五島列島の歴史を共に語り合う機会は失われてしまったが、多くの貴重な成果を残してくれた福田君に深く感謝すると共に、改めてご冥福を祈り、追悼の拙文を奉げる。

末筆ながら、奥様の、お子様方の、そしてご遺族の皆様方のご健勝とご多幸を念じつつ、

合掌。